

氏名	加藤 眞理子
職位	COE 研究員

研究概要

タイでは急速に高齢化が進展しようとしている。すでに出生率の急速な低下は明らかである。そのため高齢化対策が進む日本などの先進国ではタイを含むアジアの高齢化現象を危惧する議論が起こっている。しかし高齢化の現状についての調査研究は進んでいるとはいえない。そこで筆者は、東北タイ農村社会の高齢女性に焦点を当て、社会変動と高齢化の流れのなかで彼女たちがどのように新しい生活スタイルや価値観に対処しているのかを捉えることで、高齢化の現状を把握し、今後の地域比較や理論化の可能性を探ることを目指した。

調査対象地である東北タイ農村社会は、1960年代以降、インフラの整備、世界市場への参入、開発行政などを経て急激な社会変動を経験してきた。その結果、もはや農村社会とはいえないほど、村人たちは出稼ぎによる現金収入に依存するようになり、出稼ぎの増加による生業の変化は農村社会構造を根底から揺るがしている。特に80年代以降、未婚女性や若い夫婦の出稼ぎの長期化が顕著に見られるようになった。高齢者と子供だけの世帯が多くなり、東北タイ農村の「家族 (*khropkhrua*)」または「親密圏」は、今まさに再編されようとしている。緩やかに進む高齢化と社会変動のなかで、村に残された高齢女性の生活スタイルは変化し、それまで伴ってきた宗教的役割や社会的威信も変化した。そのような過程にある調査地において、平成20年に筆者は、本プログラムの次世代研究の助成を受け、出稼ぎに行く子どもたちに代わって、孫の養育に専念する高齢女性と「家族」との関係に焦点を当て、悉皆調査とインタビューを行った。

本年度、筆者は国内において、平成20年度の現地調査によって収集したデータの整理と考察を行った。また同時に東北タイ農村における高齢女性と「家族」「親密圏」の変容についての先行研究の収集と文献の読み込みを行った。またCOE研究員として、本プログラムの研究会やシンポジウムに参加し、他地域における様々な「親密圏」の議論を学んだ。

その結果、以下の論点において投稿論文を執筆した。

(1) 「家族」(親密圏)における高齢女性と仏教実践—出稼ぎなどの増加によって変化し続ける「家族」の形態に依拠して、50歳代から60歳代の女性が孫の養育に深く関わるようになった。彼女たちは、仏教実践に積極的に参加し始める年齢にある。仏教実践は高齢女性の生きがいでもあり、社会的地位を支える重要な行為でもある。そこで「孫の世話があるので寺に行けない」という彼女たちの語りに着目し、語りが生じた家族の環境や同居形態などを分析した。その結果、伝統的な居住慣習に支えられて、母と娘関係を中心に広がる親密な関係のなかで、孫の養育を通じて自分の生活スタイルを社会変容に適応させようとする高齢女性の姿が明らかになった。また仏教実践が寺院通いや持戒行参加が減少すると同時に、拝金主義によって現金による布施が中心になりつつあると論じた。

その成果は、本プログラムのワーキングペーパー「東北タイ農村における高齢女性の役割と仏教実践の変化—高齢社会に向けてのプロローグ」として発表した。またそれを元に投稿論文を執筆中である。

(2) 近代における高齢女性と仏教実践—調査対象とした年齢の女性のなかにも、孫の養育に関わりながらも積極的に仏教実践を行う者とそうでない者がいる。家族の支えによって孫の養育の合間を縫って持戒行に参加する高齢女性に焦点を当て、その仏教実践を民族誌的な記述を行った。また高齢女性の宗教実践に対して識字や印刷物の普及が大きな影響を与えたことから、現在見られる高齢女性の宗教における積極性は近代的なものであると論じた。その成果は、論文「東北タイ農村における識字女性の宗教実践—持戒行の事例からの考察」として『アジア・アフリカ言語文化研究』(2010年3月掲載予定)に投稿した。

